

昭和萬葉集

昭和六年～八年

卷二

講談社

昭和萬葉集 卷二

定価 一、六〇〇円

昭和五十五年五月二十八日 第一刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 一一二二

郵便番号 一一二

電話 東京 〇三九四五 一一二一（大代表）

振替 東京八三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 和田製本工業株式会社

用紙 東洋クロス株式会社

王子製紙株式会社

製函 株式会社岡山紙器所

©講談社 一九八〇年 Printed in Japan



0392-441027-2253(0) (昭萬)

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

昭和萬葉集 卷二／目次

満州事変と五・一五事件

行きづまりの時代 10

満州事変 11

上海事変 14

肉弾三勇士 16

満州国 19

国際連盟脱退 21

テロリズム 23

五・一五事件 24

五・一五事件公判 26

世を憂う 27

軍靴の響き

動員・召集 31

召集の恐怖 33

兵を送る 35

哀しい兵隊 37

戦地にて 40

日本の軍隊

徴兵検査 53

軍隊生活 56

演習風景 59

兵のいる光景 62

馬と兵隊 64

海軍 67

観艦式 68

愛国号 70

飛行機 71

分宿 73

軍隊の周辺 74

戦場を思う 44

留守家族たち 46

戦死者を思う 48

遺骨を迎える 50

傷病兵 52

凱旋兵 53

II

非常時日本

銃後にて	80
防空演習	83
燈火管制	84
軍需工場	86
皇太子誕生	87
行幸・行啓	89

日本さまごま

都市光景	91
下町の周辺	93
電燈	94
町の表情	95
分譲地	99
工場地帯	101

冬の時代

小林多喜二虐殺

130

歓楽の巷

レビュー・映画	102
スポーツ	104
白木屋大火	105
大トンネル	106
ロス・オリンピック	107
心中・自殺	108

生活の周辺

朝	109
街上で	111
夕	113
夜	116
ある日	118
ある光景	120
生活の周辺	124

冬の時代

共産党旋風
獄中の歌

131
134
136

憂鬱な世代

138

きびしい生活

減俸・低賃金

142

不景気・倒産

143

製糸業の不況

145

首切り

146

失業者

148

就職難

149

貧しいくらし

152

ルンペン

155

IV

貧しい農村

凶作・飢饉・身売り

172

豊作飢饉

173

貧しい村

175

農政の貧困

176

時局匡救事業

178

農作業

179

養蚕

181

家畜

183

仕事の歌

仕事の歌

193

工場にて

198

商人の歌

199

医者之歌

201

教師の歌

202

炭焼き

185

小作と地主

186

農家の日々

187

外地で

外地へ

159

満州にて

160

中国にて

163

台湾にて

165

朝鮮にて

166

ブラジルにて

167

ドイツにて

168

V

愛と死

愛の歌

208

妻を

212

夫を

216

父母を

217

父の死

219

妻と母と

220

みどりご・幼な子

221

わが子

223

病者の歌

胸を病みて

232

病床にて

237

良薬を求めて

240

不自由な体

241

大熊長次郎の死

230

兄弟・家族

227

師友

229

子の死

225

VI

四季の移ろい

四季折々

244

春

248

夏

250

秋

253

冬

255

歳晚・新年

257

天地自然

天地自然

258

月

261

雪

263

海

264

山

266

地震

270

ふるさと	271
旅	273
外国旅行	278
鳥	280
いきもの	284
草木虫魚	286

くさくさの歌	
口語短歌の試み	289
学芸	292
ある思い	294
くさくさの歌	297
折々の歌	301

短歌の散文化と現実化〈昭和短歌史概論〉

戦中派世代の幼年期〈昭和史私論〉——山田宗睦

年表

作者略歴・索引

脚注目次

〔満州事変と五・一五事件〕		
一九三〇年代	10	
満州事変	10	
関東軍と満鉄	12	
満蒙問題	13	
板垣征四郎と石原莞爾	14	
上海事変	15	
肉弾三勇士	16	
〔満州国〕の成立	18	
溥儀	19	
「日滿議定書」	20	
国際連盟脱退	21	
松岡洋右	22	
血盟団事件	22	
五・一五事件	23	
菊竹淳の時局批判	26	
五・一五事件その後	27	
「日米戦わば」	28	
《軍靴の響き》		
召集	32	
満州への動員	36	
動員兵力の急送	37	
錦州攻撃	40	
熱河作戦	42	
〔討匪行〕	42	
中国の民族運動	44	
中華ソビエト臨時政府	46	
「暫行懲治盗匪法」	47	
塘沽停戦協定	48	
戦死者	50	
凱旋兵	53	
《日本の軍隊》		

徴兵検査	54
徴兵忌避	55
軍隊生活	56
内務班と私的制裁	58
演習	60
陸軍大演習	60
教練	62
兵士の休日	63
軍馬	64
国産自動車	65
海軍の軍備	66
軍政派と艦隊派	67
観艦式	68
受国号と報国号	70
軍用機	71
分宿	73
「のらくろ」	74
軍人赤化問題	74
職業軍人	76
ゴ・ストップ事件	77
《非常時日本》	
「非常時日本」	80
国防献金	80
銃後の女性たち	82
防空演習	83

燈火管制	84
桐生悠々	85
軍需産業	86
軍需経済	87
皇太子誕生	88
行幸・行啓	90
《日本やまのま》	
大東京の誕生	90
東京の道路網	91
東京の地下鉄	92
盗電	94
ヨーヨー	94
「東京音頭」	95
大道芸人と行商	97
紙芝居	98
分譲地	99
『山谷集』	100
工場地帯	101
ミルクホールとカフェ	102
大衆娯楽	102
トーキー映画の登場	104
白木屋大火	106
長大トンネルの開通	106
ロス・オリンピック	107
心中・自殺	109

《生活の周辺》	
スポーツの大衆化	110
反帝同盟と反戦デー	111
花電車	115
流行歌の全盛時代	118
婦人運動	128
《冬の時代》	
小林多喜二虐殺	130
「治安維持法」と弾圧	131
特高	132
滝川事件	132
佐野・鍋山の転向声明	134
共産党旋風	135
「三二一テレーゼ」	137
『日本資本主義発達史講座』	138
コップ	139
憂鬱な時代	140
《きびしい生活》	
低賃金・減俸問題	142
世界経済の中の日本	143
製糸業の不振	146
失業者	148
「大学は出たけれど」	149
貧しいくらし	153
ルンペン	155

労働争議	156
《外地で》	
満州の日本人	160
武装移民	162
屯墾病	164
朝鮮の「近代化」方針	166
ブラジル移民	168
ナチスの制覇	170
《貧しい農村》	
農民の窮乏	172
農村救済運動	176
農村救済計画	177
時局匡救事業	179
養蚕農家	181
小作争議	187
軍事映画	192
《仕事の歌》	
工場労働者	198
町工場と二軒長屋	199
「サクラ読本」	203
「赤化教員」事件	205
《病者の歌》	
昭和初期の病歌人たち	233

◆凡例

1 本全集は、昭和元年から五十年までの間に

つくられた短歌を対象として、一般投稿歌、依頼出詠歌、各種資料からの発掘歌等々を、選者の選をへて編集した。

2 収録作品は、作歌年（作者本人の申告もしくは初出掲載誌発刊年等）によって分類し、年代順に巻分けを行なった。

3 各巻内は、作品のテーマ、素材により分類・配列した。また分類ごとに初出作品の

上段に、色刷で編集小見出をつけた。

4 作者名の下に、生（没）年、出典、小題等

を必要に応じてつけた。

・収録作者全員の作者略歴・索引を巻末につけた。

・生年または現存（没年）が未詳の場合は；で示した。

【例】大8：〈生年のみ判明〉

：昭20〈没年のみ判明〉

・出典は、原則として編集部が典拠としたものを示した。『』は歌集、『』は新聞・雑誌などを、また（ ）内の数字は、刊行年、刊行年月（日）号を示す。

【例】『形相』（23）〈昭和二十三年刊〉

「アララギ」（17・2）〈雑誌「アララギ」昭和十七年二月号〉

朝日新聞（17・12・8）〈昭和十七年十二月八日号〉

・二首以上の収録作品で、出典が複数となっている場合の表示。

【例】「アララギ」（17・9、10）〈九月号と十月号〉

「アララギ」（17・9）Ⅱ三首（18・3）Ⅱ二首〈十七年九月号から三

首、十八年三月号から二首〉

・必要に応じて、出典の下に原典につけられた小題を付した。

【例】『露原』（22）——食生活〈歌集「露原」にある「食生活」という小題のついた一連からの抄出〉

・必要に応じて、作歌時の所在地、未発表作の典拠等をへへ内に記した。

【例】〔北支にて〕（日記より）

（沖修二）〈阿南雅幾伝〉（45）より、戦後の現代かな使用による作品を除いて、作品の表記は旧かな使用を原則とした。なお、漢字は原則として新字体を使用し、よみがな（ルビ）は編集部判断で加減した。

6 作品の下段に色刷で脚注欄を置いた。

・昭和史事項、短歌史事項の解説脚注は、太字（ゴチック体）で見出をつけた。なお（ ）内は執筆者名。

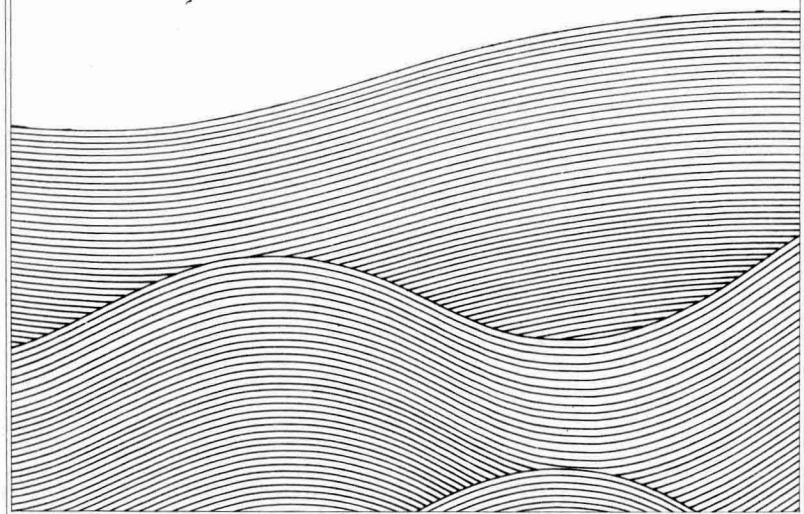
・作品中の難解語、特殊用語、古語、誤解を生じやすい語などに語注をつけた。

・収録作品につけられていた詞書は、必要に応じて「詞書」と頭につけて脚注欄に引用記載した。

・検索しやすいように、作品の末尾と該当する脚注の頭に、＊または＊＊をくりかえし付して、対応させた。

【本巻収録の作品の作者・著作権者で、所在不明等のため、連絡のとれない方があります。巻末作者略歴・索引の＊印を付した作者がこれに該当しますが、お心あたりの方は、編集部まで御一報くださいますようお願いいたします。】

I



満州事変と五・一五事件

半田良平 明20→昭20 『半田良平全集』(33)

行きつまりの時代

このままに過ぐべきことかわが国のいづこを見ても行き詰りたり
新しく興る階級の跼音を遠くにききてわれ疑はず

国こそり人勢ふときなにゆゑの戦ぞやと思ひ見るべし

南谷和吉 明37→昭13 「アララギ」(8・9)

むしろ動乱を願ふが如きことを云ふ友が言葉も感傷にすぎず

高田 昇 明37→ 「歌と観照」(8・6)

戦争あらむ願ひをあはれした思ふわれと告げなば人よ瞋るか

宇都野 研 明10→昭13 『宇都野研全集・上』(13)

残る生の憂鬱を言はんや今の青年身をおく次代の予感に怯ゆ
いと甚く微さきものの一人だに。パンに飢ゑぬ世となる他はなし

土屋文明 明23→ 『山谷集』(10)

一九三〇年代 一九二九(昭和四)年秋、米国におこつた経済恐慌は、たちまち世界にひろがり、資本主義体制の危機を打開するためには暴力独裁をもちとわれないとするファシズムの波が、欧米各国に浸透しはじめた。すでに権力体制を確立したイタリアのムソリーニ政権はもちろん、ドイツにおけるナチズムの権力奪取、仏・英両国や中・東欧諸国のファシズム集団の活動、そして「アスピリン・エイジ」と呼ばれる米国の危機が病根の深さを物語っていた。それは資本主義体制の危機の反映であるばかりか、大衆社会状況の下における近代民主主義の危機でもあった。日本もその例外ではなかった。一九三〇年代の日本は、深刻な恐慌による荒廃を、中国に対する侵略行動の開始と、国内における「非常時」体制の強化とによって打開しようとする動きによって、急速に戦争への道を進みはじめたのである。(原田勝正)

満州事変 昭和六年九月十八日午後十時三十分すぎ、奉天独立守備隊第二大隊の一個中隊は、奉天(瀋陽)北方で夜間演習を実施し

堪へしのび行く生を子等に吾はねがふ妻の望は同じからざらむ

力及ばぬ過ぎにし世をばなげき来ぬ吾が父も吾もわが子等はいかに

うつりはげしき思想につきて進めざりし寂しき心言ふ時もあらむ

山本康夫 明35「水鏡」(8・6)

九二式攻撃機の爆音ひびきわたり世のもろもろの音ひそまれり*

村田千代乃 明16「昭20」『アララギ』(6・11)

選挙戦のメガホン交錯する宵路を満州事変の号外は出づ

厚見多可子 「アララギ」(6・12)

満州の野にたたかひの起りつつありとも知らず昨日はすぎし

山田薫里 「アララギ」(7・1)

号外の鈴をきき吾は飛び出でぬ満州の戦のさまを知らんと

甲斐雅人 大2「水鏡」(6・12)

此の地遠くまこと戦は起りたり朝空を仰ぎつつしまざらめや

人の生死の号外次々に出るを我馴れては楽しむ如し畏かれども

た。その最中、この中隊に所属する河本末守中尉の率いる数名が、

付近の柳条溝で南滿州鉄道の線路に黄色方形火薬を装填・爆破、下

り線が約七〇[°]、上り線が約一〇[°]破壊された。上り線の破壊は小さく、しかも現場は下り勾配にな

っていたため、その直後に上り急行列車がさしかかったが、無事通過した。しかし、線路爆破の大きな響きはあたりにとどろき、河本中尉は中隊長に「支那軍が線路を爆破」と報告、また独立守備隊柳条溝分遣隊は大隊本部と奉天特務機関に爆破を報告した。大隊長は麾下の中隊に出勤を命じ、柳条溝近くにある中国東北軍の兵営北大宮に対する攻撃を開始、守備隊営庭にかねてから準備していた二四[°]の攻城砲も砲門を開いた。旅順の関東軍司令部では、しらせを聞いて十九日零時二十分、軍司令官・本庄繁中将が発庁、黙考の末全面的攻撃を命令した。関東軍は全面的な軍事行動を開始し奉天を占領、中国東北各地への進撃にうつった。(原田)

*九二式攻撃機Ⅱ九二式艦上攻撃機。紀元二五九二(昭和七)年に採用されたことにより制命された。

伊東千鶴子 明32「水邊」(6・12)

ふときめし夜ふけの街を何事ぞあわただしくも往きかふ自動車^{くるま}

我立てる土につづきてほど近くまこと戦^{たたかひ}はじまりしとふ

満州の空は日にけにすみてゆく人の戦にかかはりもなく*

今村里紀子「水邊」(6・12)

警笛に飛び起き急ぎ帯しめぬ足のふるひはとめん術^{すべ}なし

領事館へ引き上げの命あり真夜中に守られ乍^{なか}ら黙^{もだ}して行くも**

恐しきこと続くものかも帯とかず心引きしめ今宵もいぬる

加藤 鑽 明29「アララギ」(6・11、12首、12)

二日前内地へ引揚げし吾が兄へ戦のこと葉書に書けり

戦の奉天市街に中学生自警の部署につけりとぞいふ

このごろ兵營のきたへきびしと思ひしに戦はそれよりほどなくありぬ

*日にけに日ましに。

*領事館は外国で自国民の保護や通商の促進をはかる役所。

*チチハルは中国東北部、黒竜江省西部にある河港都市。満州事変勃発後二カ月後の十一月十九日に関東軍が占領した。当時は馬占山率いる黒竜江省軍の本拠であった。関東軍と滿鉄。日露戦争の結果、日本は遼東半島におけるロシア租借地と中国東北部におけるロシア利権とを引きついだ。旧ロシア租借地はこれを関東州と称し、最初軍政、のち民政に移したが、約一個師団半の陸軍を置いて、大正八年四月十二日、これを関東軍と称することとした。ロシアから引きついだ利権のうち中心となるのは、旧ロシア東清鉄道の大連・長春間とその支線で、明治三十九年、政府半額出資、資本金二億円の南滿州鉄道株式会社を設立、このいわゆる滿鉄が、中国東北支配の中核をなした。米國はこの鉄道の利権を日本から譲りうけ、中国

横山梅流 「アララギ」(7・7)

寒気厳しきチチハル市には我軍の精銳みちのくの兵ぞ戦ふ

田中閑朗 「アララギ」(7・4)

年暮れむ山の湯宿に届きたる錦州総攻撃の号外を読む*

木下国一 明28〜昭54 「アララギ」(7・1)

満州事変にこころたかぶりし世のさまや支那人に紛せし役者なぐらる

高田浪吉 明31〜昭37 「アララギ」(7・1)

いまだしも兵退かず満州の事変はつひに冬に入りけり

木俣 修 明39〜『みちのく』(22)

枢ひく砲車のきしみ過ぎゆきて時雨ぞわたれ遠き枯原

戦死者のみたまいたむと家並^{やなみ}には弔旗はためく霜の朝明^{あさけ}を

アカシアの冬枯並木の道過ぐと騎馬の兵列しきりがやく

冬の日なたそがれどきはわが胸に落葉のごときはかなさぞ過ぐ

号外のこゑひたひたと走り来る雪夜^{せつや}の闇^おを怖^{おそ}ちにけるかも

は一定の幅に付属地が設定され、日本の排他的支配権が成立し、ここを守備する名目で、主要都市には独立守備隊が駐屯権を確保していた。(原田)

* 錦州は中国遼寧省西部の都市。当時張學良傘下の東北軍の司令部があったが、満州事変勃発後、関東軍の進攻により撤退、一月三日、日本軍が占領した。

滿蒙問題 辛亥革命によって中国に共和国政權が成立したことは、日本の支配者層に「満州支配の危機」を感じさせていた。このことから、滿蒙分離、すなわち中国東北、内モンゴルを中国の主權から分離して日本の支配下に含めようとする動きがおこり、軍部やいわゆる大陸浪人のグループによる「滿蒙獨立運動」が展開された。昭和三年田中義一内閣は東方會議で中国東北への進出を決定、また関東軍高級參謀・河本大作大佐による張作霖爆殺事件も、実力による滿蒙支配を企図した謀略であった。多くの国民は、日露戦争以来「満州」を「父祖の血であがなった土地」という立場で見ようとした。習慣づけられ、軍歌「戦友」のなかの「赤い夕陽の満州」は、そう

山本初枝 明31、昭41 「アララギ」(7・2、4、5、二首、9)

排日を恐れて日毎家にこもる幼子は日本へ帰りたしといふ
弾の落つる音しきりなり外出せし夫の帰りをひたすらにまつ

上海事件を報ずるラヂオの店さきに人かきわけて我はたちたり

人気なき我家の中に大砲の弾おちみたりと夫は文寄す

戦の中に別れし魯迅先生の恙なかりし事をよろこぶ*

吉野具平 「アララギ」(6・11)

上海の人の忙しき足なみは闘争あるをいま思はしむ

阿部 晃 明25、昭49 《改造社『新萬葉集1』(13)より》

避けがたき事起るらし街中に鉄条網を張りいそぎある

杉本勇乘 明39、合同歌集『上海事変歌集』(7)

爆弾にくだかれし罌は形なし真二つに折れて砲は草生に*

塹壕にいまだ戎衣の血に染みて散らばりあるをまさめに見たり*

青麦の穂波の中に黙々と墓標ぞ白し逝きにし兵の

した満州観を心情的に定着させる強い力をもっていた。(原田)

*魯迅『中国の文学者、思想家。一八八一〜一九三六。日本で医学を学び、文学による民族性の改造を志す。代表作に『狂人日記』『阿Q正伝』等がある。

板垣征四郎と石原莞爾 関東軍高級参謀・河本大佐の後任に板垣征四郎大佐が着任し、その後、昭和四年、作戰主任参謀に石原莞爾中佐が着任した。石原は戦争史に深い造詣をもち、世界最終戦を日米戦争と予見していた。その日米戦争に勝つためには「満蒙」の領有が必要というのが石原の立場であった。石原は、板垣と協力して「満蒙」領有のための具体的方策の検討にはいった。大人の風格の板垣と伶俐な石原と、二人のコンビは関東軍の幕僚につきよい影響力をもち、ついに柳条溝事件を実現させた。この事件がおこったとき、幕僚たちは、板垣・石原を河本大佐の二の舞にしないようにと申し合わせて本庄軍司令官の登庁を迎えたという。(原田)

*望々堡。土砂・コンクリートなどで築いたとりで。

*戎衣＝軍服。